
僕のありふれた？日常～黒猫と鈴の音～

荻原あきこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕のありふれた? 日常~黒猫と鈴の音~

【Zマーク】

Z2551F

【作者名】

荻原あさひ

【あらすじ】

僕のありふれた?..... 日常を皆さんにお見せしましょう。そう...
ホントにありふれた日常ですよ。僕にとってはね。

「アメル」

僕はボソッと呟き、ポケットに携帯を突っ込み走り出す。

冬の早朝身にしみる寒さの中、僕は田舎のジギングを始めた。

まあ、それはどうでもよくて…。歩道を走るもんだから、たまに遭遇するのが車に引かれて、道路に投げ出された猫や狸の死骸。

。まことに、おおきな問題であります。

今日もあつたわけだ……。

しかも黒猫だ……。

黒猫は不吉だと言われている。

一体何が不吉なのかはよく分からぬが、僕は車がないのを見計らって黒猫に近付いた。「…うわあ…」

僕は思わず呻いてしまった。

口には出したくないけど…… 脳がちょっと見えている。

当たり前だけど、血が黒猫の周りに広がっていた。

「ハア……」

僕はため息をつき、予め用意していた手袋をはめた。

「よしつ……」

僕は氣合いでを入れて、黒猫を抱えた。

ねちょっとという音がしたけど気にしない。

「わっ……あぶね

車が2～3台遠くの方に見えた。

僕は急いで、道路脇の草がいくらか生えているところに黒猫を寝かせた。

僕はもう一度確認するように、道路の方を見た。「あ……」

黒猫が横たわっていた場所に何かが落ちているのに気付いた。

僕はまた車がきていないかを確認して、黒猫が横たわっていた場所に走った。

「首輪……か……」

そこに落ちていたのは、青い首輪だった。

「飼い猫か……。可哀想に」

僕はボソッと呟いて、道路脇の方に走り戻った。

僕は黒猫の頭もとに首輪を置き、手を合図させた。

「あそこへいるよっは、マシだろ

僕はそう言って、手袋をはずし、また予め用意していた袋に入れポケットに突っ込んだ。

「はあ～さみ……」

僕はまたジョギングを再開した。それから30分程走り、僕は家に帰った。

僕はポケットに手を突っ込み、携帯を取り出した……。

「つて……あれ？ない？」

ポケットに入れておいたはずの携帯がなかつた。

「どうかで落としたのか……？ それにしても……普通気付こうぜ僕
…………」

僕は自分で自分にダメ出しして、仕方なく部屋に戻つた。

まだ両親は起きていないようだつた。

部屋に戻り、僕は手袋をゴミ箱に放り投げた。

見事に手袋はゴミ箱の中に吸い込まれていつた。

「ナイツ シューア」

と1人ガツツポーズをして、ベッドに横たわった。 - - コツンッ

「ん……？」

窓の方からそんな音がして僕はベッドから起き上がり、窓に近寄つた。

「…………マジで？」

僕は驚いてしまった。

「僕の携帯だよ……」

窓のといじりて、僕が落としたはずの携帯が置いてあった。

なんで
……
?

僕は窓から顔を出して、辺りを見渡した。

「誰もいない……」

僕がそう呟き、顔を引っ込めようとした時だった。

- - チリンッ

「鈴の音……僕はその鈴の音で、もう一度窓から顔を出した。

けれど何もいない。

「鈴の音かあ……。そういえば……あの黒猫の首輪に鈴ついてたっけ

……」

僕はそういう感じで、慌てて顔をブンブンと横に振った。

「ないないー?そんなことあるわけないって……」

たかが道路脇にどけてあげただけだ……！

黒猫の恩返し！？

つて……それ以前にそんなことあるわけないってない……！

僕は携帯を手に取り、顔を引っ込めた。

「……マジド……？」

それからとこりもの、僕はやたらと猫に好かれようになつた。

しかも……黒猫ばっか……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2551f/>

僕のありふれた？日常～黒猫と鈴の音～

2010年11月20日03時23分発行